リレー随筆　685

乳鉢

開業３年目　一生懸命

大分市医師会　　森　山　正　臣

大分市金池南で耳鼻科クリニックをしております。中津市民病院小児科の小杉先生からバトンを引き継ぎました。

花粉症が増え，発熱対応が減りつつある2月中旬の午前外来中に「中津市民病院小児科の小杉先生から電話がかかっています」と，久しぶりに小杉先生の声を聞きました。10数年前に県病に勤務していた時の恩人です。仕事はもちろんですが，出生後2週間NICUに入院していた私の次女の主治医として，一生懸命に対応してくれました。おかげさまで今は元気にしています（小学4年生です）。

今年のスギ花粉はひどいです。数年ぶりに悪化して受診する方，初めて受診する方が多いです。先輩開業医が「この10年―15年でもっともひどいシーズン」と言っています。コロナ/インフルエンザが落ち着いてきた時期ではありますが，風邪との鑑別にも気を付けています。

突然ですが，

「私たちはまえを向いて生きているんですが，幸福というのは，近い将来を見つめる視線にあるのではなく，どこか現在自分が生きていることを後ろから見ている視線の中に，ふくまれているような気がするんです」

読書すると，時に心に響くフレーズに遭遇することがあります。今回の投稿のネタを探そうと以前（5年くらい前）に読んだ本をたまたま読み返し，その中にありました。時間がたち忘れていました。何か1つくらい主張しようと，これを選びました。

私たちは前を向いて生きようとしていますが，前を見る視線の中に，幸せが含まれるわけではないとの指摘です。前のめりになって，気負って生きるのではない。「自分はこういう生き方でいいのか」「こういう歩みでいいのか」と，冷静に自分を見つめる視線の中に，幸福が含まれるのではないか。また，過去から現在を見ることで，ここに至るまでどれほど多くの人達とのかかわりがあったのか。どれほど多くの人たちの助けがあったのか。これらを思い出すとき，心には感謝の念が生じるのではないか。との解説です。いつも思い出したいです。

今日は春分の日3月21日です。侍ジャパンがメキシコにサヨナラ勝ちしました。アメリカに乗り込み，メジャー選手ばかりを擁するメキシコを相手に対等に渡り合い，勝ちました。気おくれや気負いを感じる部分もありましたが，乗り越えて，強いと思いました。夢中で応援しました。22日の決勝はTV観戦できず残念です。自分の戦いに専念します。

野球が大好きですが，さすがに50歳近くなると機会がありません。中学1年の息子とキャッチボールを楽しんでいます。

開業して3年目になりました。日々とは言いませんが月単位くらい？で変化する社会情勢やクリニック運営などにもまれています。周囲の方々からの応援に支えられています。クリニックも私も少しは成長しているのかもしれません。普段の診療が主ですが，役に立てるように一所懸命したいと思っています。よろしくお願いいたします。

次は，アルメイダ病院放射線科の松本先生にバトンを渡すことになりました。放射線科小松先生に相談したところ，すぐに対応して紹介していただきました。ありがとうございました。

リレー随筆　686

乳鉢

「捨てる神あれば拾う神あり」

大分市医師会　　松　本　俊　郎

リレー随筆の執筆が私に回ってくるとは思ってもいませんでしたが，今回同僚が森山正臣先生（森山耳鼻咽喉科院長）の知り合いということで，間接的にご依頼を受けました。さて，私事ですが，令和2年2月より現在の大分医師会立アルメイダ病院放射線科でCT, MRIの読影業務を中心に仕事をしています。まさに新型コロナが日本国内に広がり始めるタイミングで転勤となりました。それ以前は大分医科大学（現，大分大学医学部）を卒業して約34年間，大学病院の放射線科で勤務していました。大学病院では研究，教育，診療の3本柱を万遍なくこなして参りましたが，現在は学生と触れ合う機会もなく，救急医療を中心とする中核病院ですので，ひたすら読影とIVRに従事する毎日です。

こちらの病院で働き始めた当初は，「例え日常業務が忙しくても，大学時代に養ってきたリサーチマインドは忘れずに機会があれば研究をしよう」と意気込んでいましたが，時ともに土日・祝日を潰してまで研究を行う気持ちが薄らいできました。その最中，**“捨てる神あれば拾う神あり”**というのか，東海大学医学部消化器外科の先生から，知り合いの放射線科医を通じて，共同研究のお誘いを受けました。研究課題名は「フォトカウンティングCTを応用した膵癌切除可能性の前向き観察研究」であり，私が日本膵臓学会認定指導医（放射線診断・IVR）であることをわざわざ調べて下さったとのことです（ちなみに，放射線診断分野の認定指導医は全国でわずか3名）。そもそも「フォトカウンティングCTとは何？」という先生方が多いと思われますので，簡潔に説明させていただきます。実は，東海大学医学部附属病院に昨年，日本初のフォトカウンティングCT（シーメンス社）が導入されました。「X線光子を可視光に変換していた従来の検出器とは異なり，各X線光子とそのエネルギーレベルを直接検出することが可能なため，より少ない放射線量で高解像かつ有用なデータを提供できる。」というのが触れ込みのようです。0.2mmの超薄層画像が取得でき，その画像を拝見したのですが，確かに4倍拡大しても画質のボケがない点は凄いと思いましたが，ただ従来見えていない構造が果たして見えるかは疑心暗鬼です。とはいえ，画像診断の新しい分野の研究に携われるのは大変楽しみです。

そう言えば久しぶりに大学病院時代の同僚と先日食事会をしたのですが，その際，後輩から「先生の趣味は何ですか？」と唐突に尋ねられました。確かに無趣味を趣味としている自分ですが，月曜午後9時からBS-TBSで放送されている「吉田類の酒場放浪記」を見るのが趣味かな，と答えました。下戸の私（飲み会は大好き）ですが，ハンチング帽をかぶったおじさんが駄洒落を交えながら食・酒レポをする姿は疑似体験をしている気がして，日頃の疲れを癒してくれます。

まとまりのないリレー随筆になりましたが，次回は大分岡病院のサイバーナイフセンター長で私の飲み仲間の一人である香泉和寿先生にバトンを渡します。

リレー随筆　687

乳鉢

―サイバーナイフ治療で奮闘する日々―

大分郡市医師会　香　泉　和　寿

アルメイダ病院 放射線科 松本俊郎先生よりリレー随筆のバトンを受け取ることとなりました。松本先生は同じ医局の大先輩であり私が研修医のころから今に至るまで丁寧にご指導いただいており，今でも大変感謝しております。そんな私自身も気が付けば医師になって20年以上も経っており，時が経つ速さを痛感している今日この頃です。

現在私は大分岡病院にあるサイバーナイフセンター内で勤務しており，進行したがん患者さんと向き合う日々を過ごしています。ご存じの方も多いかと思いますがサイバーナイフは非常に高精度な放射線治療機器であり，病変部をピンポイントで狙って照射するのに特化した機器になっています。頭部だけではなく頸部や体幹部など様々な部位への照射ができるように進化していますので，現在では胃・小腸・大腸を除けばほとんどの場所へ照射可能であり，位置が呼吸変動する肺癌・肝癌への照射も可能になっています。手術困難な高齢者でも治療できる可能性が出てきたのは大変良いことと感じています。

そんな夢のある最新鋭の治療機器なのですが現実にはそんなにいい話ばかりではなく，再発を繰り返して力及ばないという経験も多いのが実情です。化学療法が行き詰まり他にできる手立てが少ない中でサイバーナイフセンターに来られる方も多く，どうしてあげることもできない中で，それでも少しでも改善につながればと無理やり信じ込みながら奮闘している毎日です。頭のどこかでは『結局神様が決めた寿命を変えられるわけではないのになぁ・・』とも思いながらも。

香泉という名字についてよく『珍しいですね』と言われますが，実は元々お寺の家系でして祖父・伯父はともに住職でした。実家もお寺の隣でして小さい頃はお寺の境内や本堂で遊びまわっているような子供でした。様々なお寺の行事に参加する機会も多く，お葬式以外にも朝のお勤めやご先祖をお祭りする行事など様々なものがありました。そんな環境で育ちましたので普通の家庭よりも人の死が身近なものであった気がしています。先ほどの『神様が決めた寿命・・』なんて考えがすぐに浮かんでしまうのも育った環境の影響が大きいのかもしれません。すぐ神様仏様を持ち出してくるのは医師としてはどうなのかとも思いますが，持って生まれた性分と思ってあきらめています。

結局は医学的にできることがほとんどなくても医師として死にゆく者に対して何をしてあげられるのかということだろうなぁと20年以上も経ってやっとしみじみ実感できるようになってきたところです。周回遅れですがようやく医師としてのスタートラインに立てたところなのかもしれません。これからも日々精進していきたいと思っていますので今後ともよろしくお願いいたします。

とりとめのない話にお付き合いいただきありがとうございました。次回のバトンは大分岡病院脳神経外科 戸井宏行先生にお願いいたしました。よろしくお願いいたします。

リレー随筆　688

乳鉢

出会いの彩り
―大分で感じる縦横の繋がり―

大分郡市医師会　　戸　井　宏　行

当院放射線科の香泉和寿先生からバトンを受けました。大分岡病院脳神経外科の戸井宏行と申します。自己紹介ですが，私は四国・徳島県の生まれで，地元の徳島大学を1999年に卒業後，母校の脳神経外科に入局しました。関連病院が九州にもあり，1999年から2000年は大分中村病院に勤務していました。徳島大学および関連施設を経て，2008年から岡山県の川崎医科大学で勤めた後，2018年より再び大分県に戻ってきて現在に至ります。本稿では大分で感じた縦横の繋がりについて書きたいと思います。

地元を離れていると，些細な繋がりがとても嬉しく感じられます。大分岡病院に入職した際，同じタイミングで1名の徳島大学卒の研修医が入ってきました。予想もしていなかったので，非常に驚いたのと同時に何とも言えない嬉しさがあり，歓迎会で一緒に阿波踊りを踊ってしまったほどでした。研修期間が終わった現在も，事あるごとに交流を持てています。徳島大学医学部全体の同窓会は「青藍会」という会で，大分県内の病院にも20名ほどの先生が在籍されています。青藍会大分支部は少し休止されていましたが，2019年に再開され，諸先輩方や後輩と交流を持てて，大変感慨深かったです。2022年春にも，徳島大学を卒業した1名が研修医として大分大学に入職しており，今年開催された青藍会に顔を出してくれました。20代から70代まで幅広い世代が集まる会ですが，出身大学という強い共通項があるため，世代の垣根を全く感じずに盛り上がれます。

大分岡病院に異動した時，もう1つ驚いたことがありました。オペ室の看護師さんに「戸井先生，岡病院へようこそ。先生も『寅の会』の一員ですよ」と声をかけられたのです。一瞬何事か分かりませんでしたが，「寅の会」は阪神タイガースの応援団ではなく，昭和49年生まれ（寅年生まれ）の職員で作った集まりのことでした。寅の会には，医師，看護師，臨床工学技士，事務職員など約10名が属していて，メンバー全員が私と同い年です。事前に私の情報が入っていたようで，すぐに声をかけてくれたのでした。知り合いが全くいない病院に入職した直後，職種を越えた強靭な横の繋がりに迎え入れてくれて，本当に心強かったのを覚えています。寅の会の活動は，主に定例の飲み会ですが，世代が完全に一緒なので話題に事欠かず，公私にわたって色々なことを話すことができる楽しい会です。近々再開予定なので，それが非常に待ち遠しいです。

徳島生まれ徳島育ちの私が大分で仕事をしているのも何かの巡り合わせであり，ここで出会った方々との縁や繋がりはとても大切なものだと感じています。今後もこれを大事にしていきたいと思っていますので，その意味でもリレー随筆に加われたことは本当に有難いことです。次回は徳島大学の後輩である中山裕晶先生（中山レディースクリニック院長）にバトンを渡します。

リレー随筆　689

乳鉢

「～温泉に導かれて～」

別府市医師会　　中　山　裕　晶

大分岡病院脳神経外科の戸井宏行先生からバトンを引き継ぎました中山裕晶と申します。

別府市で令和3年5月から婦人科クリニックを開院しております。戸井先生は同郷の徳島大学の先輩にあたり大分に来てから徳島県人会で再開してから交流させていただいております。

今回私が別府に開院するに至ったいきさつについて幼少時代から振り返りたいと思います。

阿波踊りで有名な徳島市で生まれました。小学2年生頃から近くの銭湯に両親と時々通うようになり銭湯の魅力に憑りつかれました。小学5年生の時には一人で銭湯に行き，まだ今のようなサウナブームでない頃から，サウナと水風呂を繰り返し『ととのう』を実感し満喫していました。中学2年の修学旅行で初めて九州を訪れ，別府の地獄めぐり～九州横断道路経由で久住・阿蘇巡りをし，温泉の湯けむりと久住高原の雄大さに魅了され，いつしか九州に住みたいと思うようになりました。地元の城南高校を卒業し，徳島大学工学部化学応用工学科に入学し卒業しました。卒業後もしたいことが見出せず悶々とした日々を過ごしていましたが医師になりたいという思いが強くなり家庭教師をしながら受験勉強を再開し2000年に徳島大学医学部に入学しました。

私自身，自他ともに認める温泉マニアだという自負があり，学生時代にも車で片道30分かかるルネッサンスリゾート鳴門の年間会員になって年間350日は温泉に入っていました。

また長期休暇のたびに九州を旅行し各地の温泉巡りをして移住地を探していました。

その候補地としての第一候補が温泉の聖地である別府でした。ただ当時は医局という壁が存在しており初期研修病院を自由に選べない時代でした。ところが4年生の時に神風が吹きマッチングシステムが導入され自由に研修病院を選べるようになりました。

その当時TV番組「北の国から」の影響で，北海道富良野への憧れも強くなっており，6年生の夏に研修病院を選ぶために，北海道（2病院）→和歌山（白浜温泉の近くの病院）→福岡（2病院：当時は救急も考えていた）→大分（大分県立病院）を弾丸ツアーで1週間で見学するプランをたてました。当時の別府医療センターはボロボロの古い校舎のような建物で，憧れの別府ではありましたが候補にはなりませんでした。（今は病棟も建て直されて人気の研修病院になっています）。

福岡まで見学した時点ではしっくりくる病院はなく疲労だけがたまっていました。最終日に福岡から車で九州横断道路を通り久住山を眺めながら大分県立病院を目指しているときに心がだんだん解放されるのを実感し，到着前には研修病院が大分県立病院に決まっていました。北海道と大分県立病院では給料が3倍程違いましたが大分の魅力には適いませんでした。その後初期研修で当時必修

だった産婦人科を回ったときに指導医に熱心に誘われたことと，出産〜癌まで幅広く女性の一生に関わることができ内科も外科も併せ持ったような産婦人科に魅力を感じ産婦人科医になることを決意しました。

その後大分県立病院で産婦人科の後期研修医コースを終了し，専門医を取得しました。大分県立病院には7年間在籍しました。それまで医局とは無縁で入局するつもりもなかった私が九州大学に入局し別府医療センターを経て別府で開院するまでの経過については今回書ききれなかったのでまた後編で機会があれば記載したいと思います。

次回は大分県立病院時代の産婦人科部長で私の恩師であり父親のような存在のレディースクリニック松本醫院の松本英雄先生にお願いしました。

リレー随筆　690

乳鉢

子宮頸がん撲滅のために

―大分県でのHPV9価ワクチン接種率70％を目指して―

宇佐市医師会　　松　本　英　雄

中山裕晶先生からリレー随筆のバトンを受け取りました。2023年4月からHPVワクチン接種が定期ワクチン接種として復活しました。HPV9価ワクチン（HPV6型，11，16，18，31，33，45，52，58）が，従来の4価ワクチン（HPV6型，11，16，18）の他に接種可能となったわけです。1983年に，ノーベル医学・生理学賞を受賞された，ハロルド．ツール・ハウゼン博士が，子宮頸がんの原因ウイルスがHPV16型ヒトパピローマウイルス（HPV）と発表してからのワクチン開発に繋がった結果です。日本でも，HPVタイプ（型）に地域性があるのか，1988年から文部省科研特別研究班（川名班）が発足し，私も班員として参加した頃のお話しをさせて頂きます。日本では，HPV16型，18型についでHPV52型が3番目に多く（52型は日本の子宮がん患者さんから発見された），同じくHPV58型も日本人子宮頸がん患者さんから発見された型です。アジア地域でのこれらHPV型の分布をみますと，台湾，韓国，中国でも多く認められており，逆に，欧米では少ない結果となっています。欧米ではHPV16・18型に次いでHPV31型, 33型（フランスで発見），HPV45型（アメリカで発見）が多く，一方，日本・韓国・中国では，HPV33型・45型・31型が漸増してるのは興味深いところではあります。いずれにしても，これらのことから，HPV9価ワクチン接種が必要な理由です。

現在，ワクチン接種率は，15％前後であり，目標の70％には程遠い現状です。Catch up接種対象者（これまでの9年間に接種の機会がなかった対象者）の期限もあと1年半となっており，積極的に接種されることが望まれます。ワクチン接種をうければ90％の子宮頸がんが予防可能とされていますのでcatch up対象者も含めて，案内状が市役所から届いている筈なのでぜひ接種されることをお願いいたします。イギリス，ブータン，ルワンダなどの国の接種率が90％に近いのは，学校などでの集団ワクチン接種がおこなわれているからで，日本では望めません。

日本では，副反応に関して，マスコミの影響が今も根強くあり，親御さんの心配は払拭されていません。WHOはHPVワクチンによる副反応としては特異的なものはないとの広範な検討結果を発表しており，日本に対して，HPVワクチン接種を国として，再開するように，2015年と2017年の2回にわたって勧告しているのですが，国民には知らされていません。実際のワクチン接種は，県内の医師会の先生が担当されますので，是非，産婦人科・小児科・内科だけではなく，全ての科の先生にHPVワクチン接種をお願いできれば，大分県でのHPVワクチン接種率70％も夢の数字ではないものと確信します。次回は學遊会の仲間でもある佐伯市の菅野輝勝先生にバトンをお渡しします。

リレー随筆　691

乳鉢

陸の孤島の産科有床診で思うこと

佐伯市医師会　　管　野　輝　勝

日出町立日出中学校の先輩で産婦人科でも大先輩であります松本英雄先生からご指名をいただき寄稿させていただきました。2008年10月に縁あって佐伯市に産婦人科有床診療所を開業して早15年が経ちました。多くの方のご支援をいただき，今年8月末までに当院で5284人の赤ちゃんが生まれました。しかし，少子化は地方ほど顕著で，佐伯市も御多分に洩れず一昨年の出生数は291，昨年は307と年300人前後になり（開業時の2008年は533人でした），当院の分娩数も減少し病棟は閑古鳥が鳴いていることが多くなりました。2018年に国立社会保障・人口問題研究所が発表した地域別将来推計人口では，2030年には佐伯市の15歳～44歳の女性人口は2015年の日出町の同年代女性人口とほぼ同数まで減少しますので，2015年の日出町の出生数が224ですから，7年後の佐伯市の出生数は少子化が続くとそれ以下になります。何が言いたいのかというと，近い将来，産科単科の当院は経営が厳しくなるということです。

産科有床診療所の収入の大部分は分娩入院費と妊婦健診料です。つまり，分娩数が減るとダイレクトに減収に繋がり，24時間体制のため人件費は削れませんから，他業種の企業と同じく収入が損益分岐点を下回った場合は赤字になります。私が引退する時は第三者継承で分娩施設を残したいと考えていますが，少子化に歯止めがかからないようであれば，税金を投入してくれる経営主体に寄付してもいいのかなとも思っていますが，どうでしょう…頑張ります。

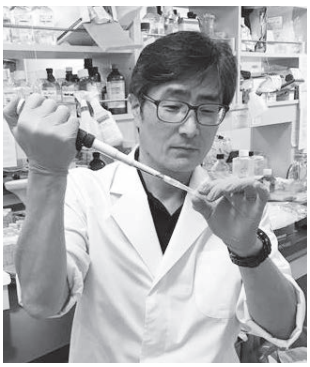
思えば，人口減少社会になったことには有効な対策を取ってこなかった私たち大人に責任があります。若者人口を増やすにはどうしたらいいのか，女性が出産してもキャリアを失わないようにするにはどうしたらいいのか，などなど，もっと意見を出し合ってこの国を維持していくべきです。人口減少に喘ぐ地方自治体の首長は国の少子化対策に頼らずに自治体独自の政策を早く実行しましょう。老朽化したインフラを修復することは必要ですが，「今必要ですか？」という公共事業等よりも子育て支援に予算を振り分けてほしい。子育て中は無理して働かなくてもいいように（あるいはベビーシッターに預けるために），子どもに習い事をさせたり家族で美味しいものを食べたり，そんな使い道で子ども宛に継続的に金券等を支給して子育てにかかる費用を支援する方が将来への投資としては賢明ではないでしょうか。地域で使ったお金は税金で返ってきますし，定着する若者が増加すると税収も増えます。土地を無償で提供したり高速料金を無料にしたりして企業を誘致してはどうでしょうか。子育てしやすい社会に変えて人口を維持していかなければ，子どもたちに過酷な未来を押し付けることになります。

次号は大分医大11期の同級生のエースで細胞生物学講座教授の花田俊勝先生へバトンを渡します。これからも母校から素晴らしい研究成果が出ることを佐伯の地から応援しています。

リレー随筆　692

乳鉢

「基礎研究室便り」



大分大学医学部細胞生物学講座　花　田　俊　勝

すがのウィメンズクリニック院長，管野輝勝先生からのバトンを受け取り，一筆を綴らせて頂きます。私は大分大学で生化学を担当している基礎医学の教員です。大分大学泌尿器科学講座で博士課程を修了する直前に基礎医学の雰囲気に少し触れたくなり，2000年，久留米大学への国内留学の機会を頂きました。その後，基礎研究の魅力に取り憑かれ，思いがけずも国内外の様々な研究所を渡り歩くことになり，2014年再び大分の地へと戻ってまいりました。

管野先生は大学の同級生で，私が信頼を寄せる医師の一人です。ウィーン滞在時には，現地の公立病院で出産を迎えた同僚夫妻の悩みに対して，管野先生が適切なアドバイスを送り，彼らの不安を取り除いてくれました。ウィーンは社会福祉が充実しており医療費も無料なのですが，公的医療サービスの質には多くの問題を抱えています。それに対して，日本の卓越した医療の質がいかに際立っているか，異国の地から眺めることでより一層強く感じられました。

一方で，我が国では，研修医制度の変革以降，研究力の低下が深刻化しています。多くの優秀な医師たちが日本の生命科学を牽引してきたことは，iPS細胞の山中先生やオプジーボの本庶先生の例をみても明らかです。とはいえ，博士号が「足裏の米粒」と称されるように，医師が研究をする必要性や，博士号の価値について疑問を抱く声も根強くあります。実際，貴重な時間と労力を注ぎ込んで完成させた学位論文の大半が，医学の進歩に貢献するどころか，引用もされないまま忘れ去られる運命となります。しかし，医師が研究の思考過程を知ることの意義は，私の目には計り知れないものとして映ります。

今のAIの進歩は驚異的で，私たちの研究の場においても欠かせない存在となっています。特に既知の領域での問題解決においては，AIがその力を圧倒的に発揮します。しかし，基礎研究とは，複雑で混沌とした問いを前にして，実験しながらその本質を探りつつ最適解へ近づこうとするプロセスであり，時として既存の知識は障害にすらなります。またこの最適解を紡ぎ出すという人間特有の緻密な思考は，現段階のAIには不可能です。そこで，よくよく考えてみますと，医師が診療の中で患者の多様な問題を総体的に鑑みながら最良の答えを模索する姿は，研究者が答えのない問いと向き合いながら実験室で奮闘する姿と重なるように思われます。正解のない問いに対して最適解を求める思考力は，早々にAIに置き換えられるものではありません。AI時代を生きるこれからの医師にとって，一度でも研究に没頭し，全思考をフル回転させながら論文を綴る経験は，決して無駄ではないと思うのです。これからの時代を担う若手医師のチャレンジに大いに期待したいと思います。

それでは，久留米大学の夜更けの実験室で共に時を刻んだ仲間である，かみぞのキッズクリニック院長神薗愼太郎先生にバトンを託します。最後までお読みいただきありがとうございました。

リレー随筆　693

乳鉢

財政審提言「診療所経営は極めて良好，診療報酬マイナス改定を」でツラいテイヘン開業医の愚痴

大分市医師会　**神薗　愼太郎**

先月1日に突如飛び出した財務省財政審の「診療報酬マイナス提言を」で「はァ？」となりました。Xでバズった国民民主党玉木代表ばりに極めて“ザクっと”いえば「22年度の診療所の収益だけど，2020年度に比べて12.0％増，利益余剰金も2割増えて儲かりすぎ。やりすぎたから診療所の診療報酬は引いとくンでヨロシク。従業員への処遇改善はストック取り崩して3％賃上げしといてよ。タンマリため込んどるやろ？」…例の財務省と厚労省のプロレスで，まずアドバルーンを上げ反応をみて取り下げるかやるかを決めるのでしょう。が，国民医療費増加を簡単に抑える有効な手段として診療報酬本体引下げ論議はくすぶり続けるのではないかと個人的には思います。

その提言とやらですが，①診療所の報酬単価の引き下げ，②地域別報酬体系導入（診療所不足地域の単価引上げ，過剰地域の単価引下げ），③一向に進まないマイナ保険証利用促進のため，利用しない患者の診療報酬引き上げ，④これまた進まないリフィル処方箋普及のため，薬剤師判断のリフィル切り替えを認め，処方箋料の時限的引下げ。②は確か5年前，奈良県がやろうとして引っ込めたヤバいヤツ，③と④は余計なお世話です。

今年度の国民医療費は約48兆円。毎年約1兆円増と増加の一途です。その要因として一般的には高齢化社会，生活習慣病の増加，高度先端医療費，診療報酬改定が指摘されています。診療報酬を－1％にした場合4,800億円圧縮可能。これは医療費の自然増8,800億円の約半分。病院勤務の先生方は低賃金で頑張っておられるので，ターゲットはあくまでシレっと楽して儲けている診療所。病院分は減らさず診療所分約9兆円中から5.4％分にあたる4,800億円を上納させれば全体で1％へらせる計算です。診療所診療報酬5％減…とりあえず20床未満の診療所は1点＝9.5円ですか。9円に締め上げれば8,800億の自然増を簡単に打ち消せそう。歴史的円安進行中の悲劇，ひどいと思いませんか。

財政審の資料にはっきりと「国民負担の軽減＝医療機関の収入減」とあります。医療機関の収入減で国民負担が減り幸せになれるという。ここ数年コロナ加算やワクチンで一時的に潤った診療所は，負担増に苦しむ国民からはやっぱりザマ見ろと思われており，反対してくれるところも日医以外特になし。惨めです。「熱が出てどこもみてくれないけど，ここで診ていただきありがとう」と町の診療所もみんなに感謝されていたのはつい昨日だったような気が…で，コロナが去ってまた診療所は国民から白眼視へ逆戻り。そろそろ潮時かナァと思うこの頃です。

リレー随筆　694

乳鉢

「3年目の発達クリニックと児童発達支援」

大分市医師会　山口智之

【府内大橋こどもクリニック】一般小児科診療も行うことと来院しやすさを意識し「府内大橋こどもクリニック」の名で2021年4月府内大橋のたもとに開業しました。作業療法士，言語聴覚士，心理士，各4-5名ずつスタッフが在職する発達・療育クリニックです。自閉症スペクトラム障害（ASD），ADHD，言語・運動発達遅滞，構音障害，吃音等の患者さんに対し，作業療法（OT），言語療法（ST），発達検査，心理カウンセリング等も行っています。開業前の2年間，県内の5歳児健診に年間50回ずつ参加させてもらった際に「療育の受け皿が必要」と痛感し，自ら受け皿を増やしたいと考え開業しました。できるだけ「訓練開始まで待機期間の短いクリニック」であり続けるべく創意工夫を重ねています。開業後には佐伯から通院される患者さんが多いことが判明したので，佐伯でも小児のOT/STが受けられる様に長門在宅リハビリテーションクリニック様と提携し，佐伯から大分まで通院しなくても佐伯で完結できるシステムを構築できました。

【児童発達支援事業所モデラート】児童発達支援（児発）は医療と連携すると効果が高まると考え開業とともに小集団・生活型の児発を開所しました。方針に賛同するスタッフが徐々に集まり，更に2022年秋に凄腕の保育士が加入してくれたことを契機に事業所・組織が劇的な変化・成長を遂げました。特にASD児に対するかんしゃくに対する効果は大きく，内服薬と同等あるいはそれ以上に改善し始め，困りの改善した利用児の保護者から「何が困りだったのかわからなくなってきました」との言葉が寄せられています。最近では年度途中でも「かんしゃくが随分改善したので，今の状態なら（モデラートでなく通常の）園でも対応できます」と“年度途中の通所終了”ができる児も増え，新たな児童を迎えることもできています。2024年度は地域への益を拡大できる様，スタッフも利用定員も増やしたいと思います。

【個別療育型の児発アレグロ】2022年夏には医療のOT/STの待機期間までに利用できる「個別療育型」の児発「アレグロ」も開所し，主に年長児の「就学前の発達スパート」への寄与を目指しています。

【今後のこと】①学習障害への対応：ビジョントレーニングを強化します。②不登校児への対応：ショートケア・デイケアを拡充します。③上述提携医療機関の拡充：国東・日田・豊後大野市等の患者さんが多いので同エリアの医療機関様と提携し小児のOT/STを開始して頂きたいです。④児童精神科対応：開業当初は「未就学児」「小3まで」と患者さんを限定しておりましたが，今では中高生の受診患者さんもかなり多く，児童精神科診療ニーズの大きさをひしひしと感じております。それらのスキルを身に付けるべく2024年度は私自身が外部機関での研鑽に励みたいと思っております。皆様のお力添えを賜りながら発達外来を拡充できますと幸甚です。今後ともご指導ご鞭撻をお願いいたします。

リレー随筆　695

乳鉢

「犬活のススメ」

大分市医師会　　中　川　健　士

府内大橋こどもクリニック山口智之先生よりバトンをいただきました，なかがわ柳通りクリニック中川健士です。大分市高松で内科・心療内科を営んでおります。2021年開業ですが，コロナ禍真っ只中であったため，会員の皆様とお会いする機会もないままでした。新年から能登半島の地震，羽田空港での飛行機事故など心を痛めるニュースが続き，新しい年を存分に楽しむ気持ちにはなれないまま2月に突入したような気がしております。このような状況下でも，私たちは前を向いて，姿勢を正し，1日1日をしっかりと生きていかねばなりません。

ここで大切になるのは，日々のストレスケアではないでしょうか。これには様々な方法があると思います。ゴルフで汗を流したり，音楽を聴いたり，あるいは少量のお酒を飲んだりと各人が独自の意見をお持ちのことでしょう。本日，私が紹介したいのは「犬活」のススメです。

愛犬は「ニュートン」と申します。これは息子の命名ですが，息子の功績の第1に数えられるほど素晴らしいネーミングと感じています。黒のトイ・プードルで，すでに一足先に目をつけていた妻から紹介され，ペットショップでひと目見たその瞬間に，そのつぶらな瞳の虜となってしまいました。ちょうどコロナが蔓延し，外に出る機会もほとんど無くなっていた頃でしたので，家でペットと過ごすのも悪くない。ということで，すぐに家族の一員として迎えることとなりました。ニュートン0歳2022年5月のことでした。

とてもひと懐っこく，大人しい犬です。家族でさえもほとんど吠える姿を見たことがありません。そんなニュートンが一度だけ，狼のような吠え声をあげたことがあります。てんかんでした。悲しいことに家に来て3ヶ月も経たないうちに，重度のてんかんを発症してしまったのです。目の前で愛犬が何度も発作を起こす様子を見るのは，胸が張り裂けそうなほどにつらいものでした。一時期は「いつ命を落とすか分からない」と主治医から告げられていましが，主治医の献身的な治療と2ヶ月に及ぶ入院の甲斐あって，奇跡の回復を遂げました。それは本当に奇跡としか言いようのないもので，今でも抗てんかん薬を内服してはいますが，以来一度も発作を起こさず過ごせています。

ニュートンは自由に家の中を動き回り，ケージを使うことはありません。しつけとは程遠い生活を送っていますが，家を汚すこともありません。いつも誰かの家族の横にそっといて，寝る時も同じベッドで眠ります。ほとんど常時愛犬の温もりを隣で感じていると，どんなに疲れていても，エネルギーが充電されていくのがわかります。「犬活」と言っても，ただ一緒にいるというだけですが，この「誰かがそばにいるという」感覚こそが，癒しの本質なのだと思います。

そんなニュートンももうすぐ4歳です。今月が誕生日なので盛大にお祝いをしたいと思っています。

リレー随筆　696

乳鉢

「思い出のスーパードルフィン」

大分市医師会　西　尾　末　広

にしお呼吸器内科・アレルギークリニック院長の西尾末広と申します。2022年10月に大分市駄原に内科の診療所を開業いたしました。

私は，日出町生まれの日出町育ちで，私自身が幼少期に気管支喘息やアレルギー性鼻炎を患っていたため，両親や祖父母に連れられて別府市内の小児科や耳鼻咽喉科に頻繁に通院していました。小児科の先生は忙しいながらも常に優しくて，頼もしく感じていたことを子供ながらに覚えており，将来は医師を目指そうと思うようになりました。

そんな私でしたが，医師以外にも憧れの職業がありました。小学生の頃，飛行機に乗った際に操縦席を見学できる機会がありました。9.11の同時多発テロ以降は操縦席の見学は出来なくなりましたが，まだ当時はフライト中に操縦席を案内してくれたり，記念撮影もしてくれていました。操縦席から見える景色を前に，自分の手で飛行機を操縦してみたいと思うようになり，パイロットに憧れるようになりました。高校生の頃に高所恐怖症だということが判明し，パイロットへの夢は儚く散りましたが，飛行機への興味は増していき，今でも機会があれば空港の展望デッキで飛行機を眺めて過ごしています。

少し前になりますが，2020年6月に「スーパードルフィン」の愛称で親しまれたボーイング737-500型機が惜しまれながらも退役となりました。イルカのようにずんぐりと丸みを帯びた愛らしい機体でエンジンにイルカの絵が描かれていることでも知られ，利用されたことがある方も多いのではないでしょうか。2019年9月（まだ武漢でCOVID-19の第1例目が報告される前です）にスーパードルフィンの「退役記念ファン感謝祭」が福岡空港で開催されることになり，幸運なことに2500人の応募者の中からわずか60人に選ばれ，息子と一緒に参加して参りました。スーパードルフィンの歴史やパイロットなど運航に携わったスタッフによる講演，トーイングカーで空港内の牽引，コックピットや機内外での撮影会などが行われ，子供の頃から利用していた大好きな機体との最後の思い出が出来ました。

2020年以降，COVID-19の感染拡大後は毎日のように防護服を身にまとい感染病棟で奮闘し，人工呼吸器を複数台管理しながら，入院患者の受け入れや院内クラスターへの対応などに追われました。しばらくは飛行機に乗る機会がありませんでしたが，今後は連休などのまとまった休みに飛行機を利用して，家族で趣味のお城巡りをしたいなと考えています。

年始に羽田空港で残念な事故が起きました。亡くなられた搭乗員の方のご冥福をお祈りするとともに，今回の教訓が安全な空の旅に活かされていくことを心から願います。